

II. 部門報告

先駆的学習支援部門

平澤則子、境原三津夫、山田正実、後田穰、野口裕子、大崎麻美

先駆的学習支援部門は、看護・医療・福祉分野の研究や実践に関する新しい知見やトピックスについて著名な学識者あるいは先駆的な活動を行っている実践者を招き、公開講座やシンポジウムを開催することにより、地域住民の方々に学習の機会を提供している。平成28年度は「市民公開講座」と上越教育大学との連携事業である「看護大・上教大連携公開講座」を開催した。

I 市民公開講座

テーマ 人体の微生物ワールド：超生命体としてのヒト

日時 平成28年10月28日(金)18:00～19:30

講師 服部正平先生(工学博士)

早稲田大学理工学術院大学院先進理工学研究科 教授

講師紹介

メタゲノム情報科学研究を推進し、腸内フローラのゲノム解析の第一人者である。DNAシーケンサーの開発では日本で早くから取り組んできた研究者の一人である。

講義内容

国際ヒトゲノム解読計画が2004年に終了し、ゲノム科学はヒト常在菌叢のメタゲノム解析へと移行した。ヒト1人に生息する常在菌の数は数百兆個に及び、その多くは嫌気性菌で培養同定が困難である。このため、その実態は謎に包まれていたが、細菌叢の遺伝子から細菌種を同定するメタゲノム解析の手法が開発されたことにより、ヒトの常在菌の解析が可能になった。

ヒトの常在菌叢を構成する主な細菌種は、ファーミキューテス門、バクテロイデーテス門、アクチノバクテリア門、プロテオバクテリア門に属し、これら4門の細菌種で99%以上を占めている。これらの菌叢構造は、鼻腔、皮膚、口腔、腸管などの生息部位により異なっており、また個人間の多様性が大きい。腸内細菌についてみると、双子間、双子—母親間でも大きく異なっていることがわかっている。また、ヒト腸内細菌叢の菌種組成の類似性は、同国間で高く、異国間で低い傾向にあり、日本人はビフィドバクテリウム属とブラウチア属が多い傾向にある。菌種組成と食事(食習慣)との相関は部分的であり、例えば中国は、食事は日本と同じグループに属するが、菌種組成は日本が属するグループではなく、アメリカと同じグループに属している。最近では、腸内細菌叢の遺伝子を解析することで、腸内細菌叢が行っている代謝機能についても解析することができるようになってきている。さらに、疾患と腸内細菌叢の関係も調べられるようになり、種々の疾患で腸内細菌叢の変容が認められている。特にクローン病や潰瘍性大腸炎などの炎症性腸疾患で研究が進んでおり、菌叢構造の変化や菌種数の有意な減少が指摘されている。



肥満の人の糞便をマウスに移植すると肥満マウスになるという実験があり、腸内細菌叢が病気発症の直接原因となる可能性が示唆されている。また、健常者の便を偽膜性腸炎の患者に移植し軽快することから、治療にも効果を発揮することが分かっている。腸内細菌叢はヒトの免疫系にも影響していると考えられ、今後さらなる研究成果が期待されている。このように、ヒト自身と腸内細菌叢は分けて考えることはできず、ヒトは腸内細菌叢と合わせて一つの生命体、つまり「超生命体」であるといえる。

参加者の状況

(1)参加者 171人

(2)アンケート結果による評価

①アンケートの回収 149人 (87.1%)

②講師の話の全体的な感想

非常に良かった	79人 (53.03%)
良かった	42人 (28.2%)
普通	3人 (2.0%)
少し難しかった	17人 (11.4%)
難しかった	4人 (2.7%)
無回答	4人 (2.7%)

③感想の一部

- これまでの大学授業でここまで菌のことをくわしくわかりやすく楽しいお話ははじめてでした。菌は食事内容や遺伝子、日内、薬の使用などで大きく変わり、また国ごとでも特徴があるということがわかりました。様々な機能があり、顔がある菌を知るのがとても楽しかったです。
- 腸内細菌が私たちの健康、生活に大きく関係していることを知ることが出来、とても勉強になりました。これからもこの研究が発展し、がん・難病など私たちの健康をおびやかす疾患に適用されるようになったら良いと思いました。今、辛い人が減ると良いです。貴重なお話をありがとうございました。
- 親と子でも全く菌が違うのに、国単位で見ると似ていることは不思議でした。便移植ができるなら、皮膚が(肌)きれいな人の肌に触れるときれいになるのでしょうか。とてもおもしろい講座でした。
- 目からウロコの話でした。
- 日本人と外国人での腸内細菌が異なることや、それらの菌を調べることによって疾患に罹患しているかいないかと知ることができると知って驚いた。興味深かった。
- 常在菌が集合体で、人間の疫病の防御に関わることには驚きであった。抗生剤で近代病が増えているメカニズムには考えさせられた。
- 腸内細菌から病気を発見できることを初めて知りました。これからの看護にも影響してくるものであると考え、とてもおもしろいと感じました。
- ヒトは DNA と常在菌から成り立っているという言葉、すごく印象的でした。細菌が、そんなに大きく人体に影響するとは…。本当に興味深く聞かせていただきました。

II 平成 28 年度 看護大・上教大連携公開講座

テーマ	女性のダイエットと健康		
日時	平成 28 年 7 月 9 日(土) 13:30～15:30		
場所	新潟県立看護大学 第 2 ホール		
講師	新潟県立看護大学	境原三津夫教授	高島葉子教授
	上越教育大学	増井晃教授	留目宏美准教授

講座の内容

本学の境原教授から、女性アスリートや中学生の無理なダイエットによる骨密度の低下など健康障害について問題提起があり、続いて本学の高島教授から、妊娠・出産におけるダイエットの影響について説明があった。次に、上越教育大学の増井教授から、なぜ女性は痩せたいと思うのか、女性が目指す美人体型と心理的要素について問題提起がされ、最後に留目准教授から“健康”を考える上での適正体重について説明があった。最後にフロアと意見交換がされ、参加者から「ボディイメージを正しく持つことが大切」という意見もあり、「ちょっとぽっちゃりくらいの体型がよい」ことが共通理解された。思春期から青年期の無理なダイエットがこころと体に及ぼす影響について深く考える機会となった。

話題提供

○境原教授(新潟県立看護大学):「無理なダイエットは不健康？」

思春期に無理なダイエットを行うことのリスクについて報告がされた。わが国では、2020 年の東京オリンピックに備えて金メダルを狙えるトップアスリートの養成が始まり、中学生や高校生・小学生までも含めて、専門家がトレーニングを行っている。このような取り組みのなかで、若い女子アスリートが過酷なトレーニングを経て、いよいよ世界と戦える力をつけた時に、突如、骨折を繰り返し、選手生命を断たれるという事態が多くみられるようになった。若年の女性アスリートは利用可能エネルギー不足およびエストロゲンの減少により、十分に骨量を高めることができず、結果として骨粗しょう症を発症することになる。これと同様の状態が無理なダイエットをした場合にも起こってくる。将来、骨粗しょう症を発症しないためには、この時期にできるだけ骨量を高め、骨を丈夫にしておく必要があるため、思春期には無理なダイエットをすることは勧められない。本日は、「女性のダイエットと健康」について、参加者と考えていきたいとの問題提起があった。

○高島教授(新潟県立看護大学):「妊娠・出産にダイエットは影響するの？」

女性は、様々なホルモンの働きにより月経周期を過ごしている。これらホルモンが正常に機能するためには、一定程度の脂肪の蓄積が必要だと言われる。月経が開始する思春期では、身長と体重がある程度伸びないと生理がこないことから脂肪の蓄積は大切だと言える。激しすぎるダイエットやスポーツは、月経が止まり、骨が脆くなるということにつながる。

妊娠期は、胎児を守り育てるために体重が 12kg 程度は増える。身体的には水や脂肪を蓄えるように変化し、便秘しやすい、活動量が低下するなどの要因で太りやすい状況ではある。しかし、無理なダイエットは、早産、児の貧血や病気の発症、低体重児の出産につながる。低体重児は生活習慣病の予備軍となることが指摘されている。妊娠中の体重調整の指導基準では、BMI で“やせ”の女性は 9～12kg 増、“ふつう”で 7～12kg 増を目安として、“肥満”の女性は個別に対応するとされている。

妊娠期の生活は、規則正しい生活と適切な食事時間と栄養バランス、カロリーの消費は日常の家事を積極的にこなすということから、そして身体を冷やさない、気持ちを穏やかに過ごす

ことに注意して、家族全体で妊婦を支えていくことが大切である。なにごとにも“ほどほど”がよく、工夫しながら楽しい妊娠ライフを過ごすことが大切である。女性にとって、妊娠・出産は健康生活を見直すよい機会となる。また、それは家族や次世代の健康を守ることにつながる。未来を守るという意味でも女性が自分の健康生活を理解することが大変重要であると考えている。

○増井教授(上越教育大学)：「なぜ女性は痩せたいと思うのか？」

現在、女性の美しさの基準はファッションショーに出演するモデルの痩せている体格である。この痩せている女性が美しいといわれるようになったのは1960年代からである。日本でも緊急ダイエット特集が雑誌の表紙を飾ることが多く、メディアも痩せに注目している。

日本人女性の体型に対する自己評価において注目されるのは、10歳代の痩せている女性は自分の体型を普通と認識していることである。これはボディイメージに歪みが生じていることが考えられる。ボディイメージの歪みには2種類あり「やせ願望」と「肥満恐怖」である。「やせ願望」とは、「スリムな体に対する過剰なあこがれ、体重が減ることへの喜びがあり、異性を意識するよりも対同性ないし自己満足的な色彩が強いこと」である。「肥満恐怖」とは、「体重がわずかに増えただけで肥満になるのではないか、あるいは実際は増えていないのに増えるのではないかという恐れを抱くこと」である。このボディイメージに関して、日本と韓国を比較した調査がある。日本においては太目に評価し、韓国においては細目に評価していることや、太目に評価した日本では自己肯定感が低く、細目に評価した韓国では自己肯定感が高かったという結果が出ている。自己肯定感が低いとボディイメージが歪むことから、日本においてはこのような女性が多いことがわかった。また、自己肯定感が低いと摂食障害につながりやすい。この摂食障害は精神科領域では死因の一つとなる重要な疾患であり、思春期に発症しやすく女性が多いという特徴がある。摂食障害は挫折体験や喪失体験から引き起こされることが多く、喪失体験で損なわれた自尊心を取り戻すために、ダイエットに走りやすい。そういう循環を作りださないために、「自己肯定感を育てる」「痩せ=美しいというメッセージを減らす」「自分にあった体型を知る」「ダイエットの本来の目的・必要性を考える」「急に痩せはじめた子供を見つけたら、『どうしたの?』と心配して声をかける」ことが必要である。

○留目准教授(上越教育大学)：「ちょうどいい体重ってなに!？」

痩せている女性の比率をみると、先進国の中で唯一日本が10%台を示し、ここ20年ほどで体重増加を憂う子供たちや体重減少を喜ぶ若者が増加し、貧困のためではなくこのような背景からのやせ思考が高まっていることが伺える。20歳までは体をつくる時期、20歳以降はつくられた体を守り維持していく時期であり、適切に自身の体をケアしていく必要がある。

ちょうどいい体重をみる客観的指標は、BMIと標準体重である。実際の測定値と自己のイメージがずれているなど、自己認知のゆがみの問題も明らかになっている。また、客観的な情報だけでなく主観的な感覚も大切である。やせ傾向、太り傾向でも何かしらの症状が出る。調子が良い、体調が気にならないくらいを“ちょうどいい”とし、体の感覚も大切にすることが必要である。それでも体重が気になるというときは、その重さを気にするのではなく、中身を問うことをしてはどうか。身体の重さには、脂肪だけでなく骨や筋肉の重さも含まれている。体重を減らすことよりも均整の取れた体型づくりを行っていくことが健康な体へとつながり、そこには“ちょうどいい体重”がついてくる。今回、具体的な数値では示さないが、私たち自身が生活の中で“ちょうどいい体重”を探っていくことが重要であり、それがとても大切なことなのである。

参加者の状況

(1)参加者 71人

(2)アンケート結果による評価

①アンケートの回収 49人 (69.0%)

②講師の話の全体的な感想

非常に良かった	20人 (40.8%)
良かった	23人 (46.9%)
普通	1人 (2.0%)
少し難しかった	1人 (2.0%)
難しかった	0人 (0.0%)
無回答	4人 (8.2%)

③感想の一部

- ・自己肯定感の低さからダイエットにしがみつくとのお話しにハッ！としました。
- ・連携公開講座という意味がよくわかりました。特に最初の境原先生が、次に続く先生方の話について触れて下さったことで、4つの話のつながりがわかりました。看護大と教育大の連携として、よいテーマだったと思います。
- ・自己肯定感をもつこと、ボディイメージを正しくイメージすること、ダイエットによる無月経、妊婦のダイエットによる低体重児の出産など、学校教育の中で伝えていかなければという思いを強くした。
- ・日本人のセルフイメージに関係する内容等も含まれており、幅広い視野で健康について考えるきっかけになった。
- ・女性とダイエット、続編が聞きたいです。生活をどう改善すればいいのか、具体的な説明が聞きたいと思った。



Ⅲ その他

平成28年度は、看護大・上教大連携公開講座の動画を看護研究交流センターのホームページにアップし視聴できるようにした。

地域社会貢献部門

高林知佳子、大久保明子、川野英子、安藤亮、天谷まり子、
久保野裕子、安達寛人、伊藤ひかる、坂田智佳子

地域社会貢献部門では、地域住民の方々が気軽に大学に足を運び、健康について関心を寄せ、学び合う場を目指す「看護大いきいきサロン」を平成 21 年度から開催している。

I 開催状況

平成 28 年度は、5 月から 11 月にかけて計 6 回、いずれも平日の夕方に開催した。講師は、上越地域で開業している医師、歯科医師、上越地域の病院の薬剤師、上越地域のレクリエーションコーディネーター、大学の教員とし、それぞれの専門とするテーマでの講演の後、地域住民の方々からの質問に答えてもらう時間を設けた。

平成 28 年度の参加者は 841 人であり、平成 21 年度から開始して、いきいきサロンの参加者は通算 4,843 人となった。

表 1 開催日時およびテーマ・講師と参加人数

回	日時	テーマ	講師	参加人数
第 1 回	5/19(木) 18:30~19:30	歯を「なおす」から「まもる」へ	羽尾歯科医院 春日山 院長 羽尾博嗣先生	98 人
第 2 回	6/16(木) 18:30~19:30	認知症予防につながる脳トレ法	上越市レクリエーション協会 事務局長/レクリエーションコーディネーター 春日清美先生	170 人
第 3 回	7/21(木) 18:30~19:30	薬剤師が本音で語る薬の功罪	上越地域医療センター病院 薬剤師 宮川哲也先生	154 人
第 4 回	9/15(木) 18:30~19:30	人と人とのつながりが みんなを元気に	新潟県立看護大学 地域看護学 講師 井上智代	104 人
第 5 回	10/20(木) 18:30~19:30	見て学ぼう皮膚の病気 ～どういう時に皮膚科を 受診したらいいのか?～	わか皮ふ科クリニック 院長 石田和加先生	168 人
第 6 回	11/17(木) 18:30~19:30	ストレス —「スタンフォードのストレスを 力に変える教科書」の紹介—	柏崎厚生病院 精神科医長 川村剛先生	147 人

II 参加者のアンケート結果

1 参加者の年代・性別

60歳代が270人(39%)と最も多く、次いで70歳代が167人(24%)、50歳代が118人(17%)であった。

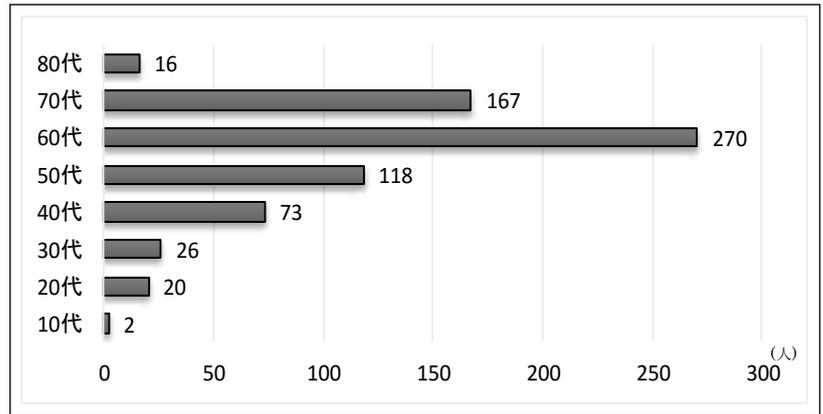


図1 年代

2 参加者の性別

性別では、男性が158人(23%)、女性が504人(72%)であった。

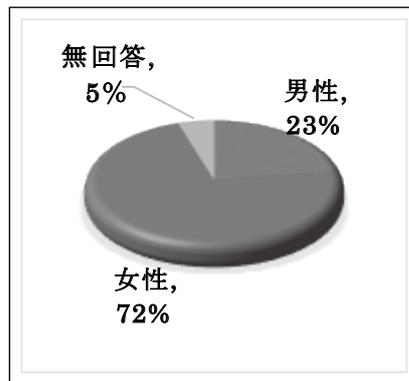


図2 性別

3 これまで参加した回数

これまでに「1~5回」参加した人が256人(37%)と最も多く、次いで「初めて」参加した人が218人(31%)であった。

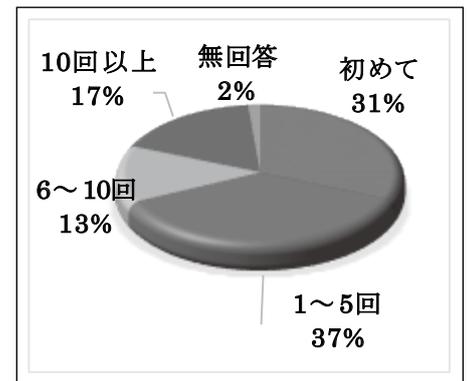


図3 参加回数

4 周知方法(複数回答)

「チラシ」を見て参加した人が174人(25%)と最も多く、次いで「新聞」147人(21%)、「リーフレット送付」145人(21%)、「市広報誌」136人(20%)、の順であった。

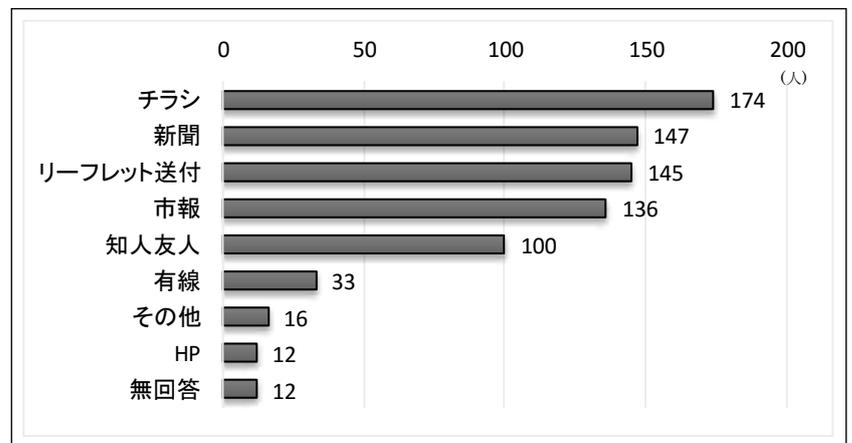


図4 周知方法(複数回答)

5 参加理由(複数回答)

参加理由では、「テーマに興味・関心があったから」が473人(68%)と最も多く、次いで「講師の話が聞きたかったから」が149人(21%)、「健康のため」が143人(21%)、「毎回参加しているから」が105人(15%)であった。

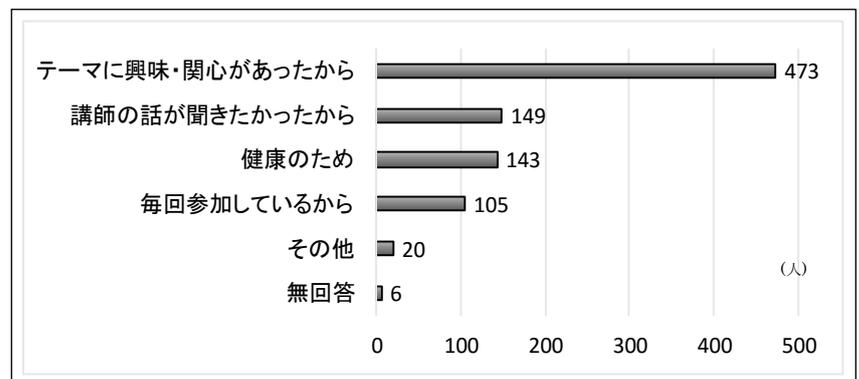


図5 参加理由(複数回答)

6 講師の話についての感想

全体では、「非常に良かった」と回答した人は 386 人(56%)、「良かった」と回答した人は 238 人(35%)であった。

6 回の講義ともに、8 割以上の人々が「非常に良かった」「良かった」と回答していた。

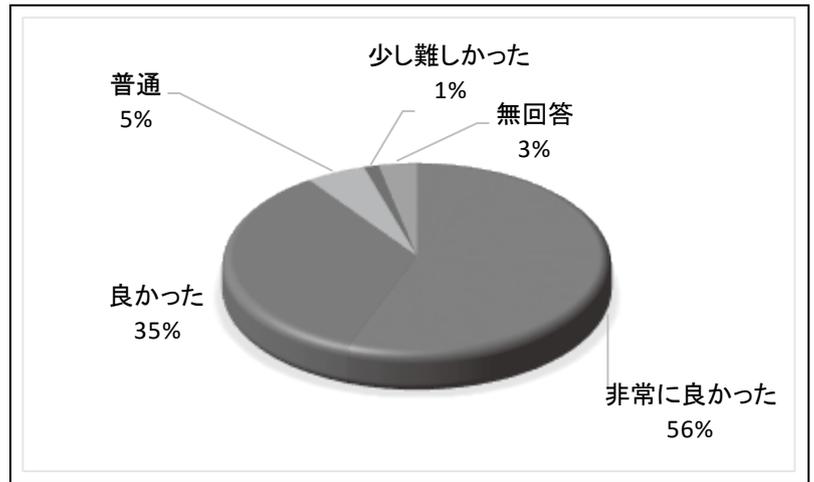


図 6 講師の話についての感想

7 今後、とりあげてほしいテーマ(複数回答)

多かった項目は「生活習慣病」196 人(28%)が最も多く、次いで「認知症」193 人(28%)、「ストレス」168 人(24%)、「肩こり、腰痛」158 人(23%)、「がんの話」157 人(23%)であった。

その他自由記載では、感染症、アレルギー・喘息、膝の痛み等、多くのテーマがあげられた。

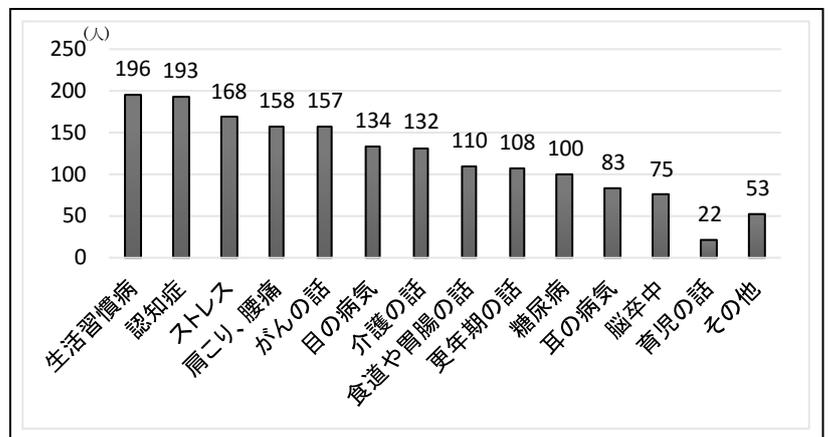


図 7 今後とりあげてほしいテーマ(複数回答)

III いきいきサロンの運営

1 企画実行メンバー

地域社会貢献部門のメンバー9 名が主に企画と運営を行った。サロン通信の作成、新聞広告への掲載依頼、講師交渉と接待、参加者への景品の準備、当日運営等をそれぞれが役割分担して行った。

ポスター・チラシの作成・発送、講師資料の印刷、当日の受付等については、看護研究交流センター事務局の事務職員から、当日の会場準備は大学の事務職員から手伝ってもらった。

当日の運営では、学生アルバイト 2 名から、会場準備と受付を行ってもらった。

2 広報活動

看護研究交流センターリーフレット(ご案内)の発送、FM-J の出演(1 回)、看護大いきいきサロン通信の発行(2 回)の他、毎回実施前に、ポスター・チラシの作成と配布、大学ホームページでの情報公開、NIC かわら版、上越タイムス「くびきの創信」、上越よみうり、上越 ASA ニュース、市広報誌への掲載を行った。

3 講師謝礼

学外からの講師には1回1万円および交通費を支払った。

4 参加者への接待

昨年と同様、参加者に対してお茶のサービスを行った。初回参加者には講義資料の保管用として看護大いきいきサロンと大学のロゴマークがついたファイルを配布した。また開始前にリラックスできるような音楽を流すことや、机にテーブルクロスをかけることで、サロンの雰囲気を出すための工夫を行った。また、サロンの最後に他のセンター事業等のお知らせと参加の呼びかけを行い、他部門の事業の宣伝も努めた。

IV 平成28年度の評価と今後の課題

28年度は、昨年度の750人をさらに上回る参加者数(841人)であり、このうちの4割弱が初めて参加していることや、いきいきサロンが開始されてからの8年間で通算4,800人を超えたことから、地域住民の方々に対する看護大いきいきサロンの周知度がかなり高まっていることが考えられる。

一方、今年度6回開催したうちの4回は、参加者数が140人を超え、このうちの1回は過去最多(170人)の参加者数となったため、隣接しているホールとのパーティションを外し、会場スペースを広くして開催した。

今後も参加者が、お茶を飲みながらの和やかな雰囲気の中で、ゆったりと講師の話が聞けるよう、次年度は、特に参加者数が多い外部講師によるいきいきサロンでは、第1・2ホールを開放する方向で対応することとした。但し、5限目の第1ホールもしくは第2ホールが授業で使用されていた場合は準備が間に合わないことから、パーティションは外さず、その代わりとして第2ホールの後部スペースを椅子のみの形式にすることとする。

また今後は、いきいきサロン本来の目的である健康に関心のある住民の方達と看護や健康などの専門家との交流の場としていくためにも、いきいきサロンの60分間の時間配分は、講師からの話題提供だけでなく、参加者と交流する時間も十分に設けることが必要と思われた。



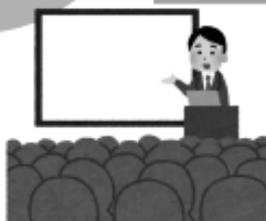
公立大学法人 新潟県立看護大学 看護研究交流センター 地域社会貢献部門



看護大いきいきサロン通信

第8巻 第1号 2016年5月19日

いきいきサロンは、地域住民の皆様が気軽に集うことを目的として本学で実施しているサロンです。毎回地域のホームドクターや医療・福祉の専門家、本学の教員が健康や医療・介護等についてのお話をします。今年度も様々な分野の講師をお招きし、今後もバラエティに富んだテーマの講演が予定されています。ぜひお越しください！



講座はすべて木曜日の18：30～となっています！
お申込みは不要です、どうぞお気軽にご参加ください。
ご参加いただいた方には、サロンで配布された資料を収めることができるクリアブックをお配りします。

日時	テーマ	講師
6月16日（木） 18：30～19：30	認知症予防につながる脳トレ法	上越市レクリエーション協会 事務局長 レクリエーションコーディネーター 春日 清美先生
7月21日（木） 18：30～19：30	薬剤師が本音で語る薬の功罪	上越地域医療センター病院 薬剤師 宮川 哲也先生
9月15日（木） 18：30～19：30	人と人とのつながりがみんなを 元気に	新潟県立看護大学 地域看護学 講師 井上 智代先生
10月20日（木） 18：30～19：30	見て学ぼう皮膚の病気 ～どういう時に皮膚科に受診 したらいいのか？～	わか皮ふ科クリニック 院長 石田 和加先生
11月17日（木） 18：30～19：30	ストレス ー「スタンフォードのストレスを 力に変える教科書」の紹介ー	柏崎厚生病院 精神科医長 川村 剛先生

昨年度の第1回「腰痛を予防するには？」の様子です！
平成27年度開催全6回の参加者は延べ750人であり、過去最高となりました。平成21年度の初回からの通算参加者は4,002人と4000人を超えました。
今後も皆様のニーズに沿ったテーマでサロンを開催できればと思いますので、聞きたいテーマや気になっていることがある方はお気軽にアンケートにお書きください。



資料 2—平成 28 年度いきいきサロン通信第 2 号



看護大いきいきサロンは、健康に関心のある地域の皆様が、気軽に集うことを目的とした公開講座です。
第 1 回～第 3 回の様子をお伝えします。これから実施されるいきいきサロンにも、ぜひお越しください！

第 1 回：歯を「なおす」から「まもる」へ (5/19)

講師：羽尾博嗣先生（羽尾歯科医院 春日山）

「歯は命の源」です。予防歯科を行う最大の目的は、歯を残すだけではなく、豊かに生きるための生活の質を高め、お口から全身の健康を維持することです。お口のケアを行うことで、全身の健康にどのようなプラス効果があるのか、わかりやすく伝えていただきました。参加者からは、わかりやすく、ユーモアのあるお話がとても楽しかったなどの感想がありました。



第 2 回：認知症予防につながる脳トレ法 (6/16)

講師：春日清美先生（上越市レクリエーション協会）

超高齢社会においては、80 歳、90 歳になっても、しゃきしゃき元気に生きられる「健康寿命」を伸ばすことが自分自身の幸せにつながっていきます。認知症や寝たきりにならないよう、楽しく頭と体を動かし脳を活性化し認知機能を高めていきましょう。講義では、参加者全員で楽しみながら、頭と体を使う脳トレを行い、会場は笑い声で溢れていました。

第 3 回：薬剤師が本音で語る薬の功罪 (7/21)

講師：宮川哲也先生（上越地域医療センター病院）

薬は必要なものですが、正しい使い方をしないとリスクも多いものです。多くの薬を飲むことにより、相互作用により薬が効きすぎる、薬の管理が難しくなる、精神的負担が増えるなど、様々な問題が出てきます。薬のメリットとデメリットについての具体的な話を聞き、参加者からは、わかりやすかった、薬の大切さや危険性がよくわかったなどの感想がありました。



【今後の予定】事前のお申し込みは不要です、お気軽にお越しください！

第 4 回 9 月 15 日（木） 18:30～19:30	人と人とのつながりがみんなを元気に	新潟県立看護大学 地域看護学 講師 井上 智代先生
第 5 回 10 月 20 日（木） 18:30～19:30	見て学ぼう皮膚の病気 ～どういう時に皮膚科に受診したらいいのか？～	わかふ心科クリニック 院長 石田 和加先生
第 6 回 11 月 17 日（木） 18:30～19:30	ストレス —「スタンフォードのストレスを力に変える 教科書」の紹介—	柏崎厚生病院 精神科医長 川村 剛先生

看護職学習支援部門

岡村典子、飯田智恵、高林知佳子、中澤紀代子、石原千晶、
高塚麻由、川島良子、大倉由貴、相澤達也

I 本部門の事業目的

新潟県内、特に上越地域の看護職の総合的な資質向上を目指し、様々な学習および研修の機会を提供する。このことにより看護職の資質向上をはかり、県民のヘルスケアの充実を目指す。加えて、卒業生の卒後教育も視野に入れた看護職の復職支援を行う。

II 平成 28 年度の事業の概要

今年度は、看護職向け公開講座(専門公開講座＝どこでもカレッジ公開講座)を 14 回開講(昨年度 14 回)、どこカレ通信の発行(4 回)、バーチャルカレッジの開講を継続して行った。本部門では、公開講座、およびバーチャルカレッジの 2 つの活動を「どこでもカレッジプロジェクト」と通称し、広報活動を行っている。以下に、事業の詳細を記す。

1. 専門公開講座(どこでもカレッジ公開講座)

専門公開講座は 14 回(前年度 14 回)開講した(表 1 専門公開講座開催実績参照)。看護職向けとしているが、ほとんどの講座を、介護職を中心に多職種にも公開している。今年度は、昨年度の参加者の方々から寄せられた希望する公開講座のテーマに関するご意見をもとに公開講座のテーマ選定を行った。最新トピックスには、要望の高かった“看取り”を取り上げ、長岡西病院の緩和ケア認定看護師の涌井裕子さんに「終末期の見取りについて」をテーマに講演をしていただいた。終末期にある方の身体的・心理的特徴、ご家族の思い、看取りケアにおける援助者の姿勢などについて話していただき、参加者からは「日々の丁寧なケアが大切、という言葉が響きました」といった感想が寄せられた。

その他、看護研究支援(5 題)、看護実践スキルアップ(8 題)の講座を開催した。看護研究支援では、本学の石田和子先生に「看護研究のテーマをみつけよう」、「さあはじめよう看護研究」の 2 講座をご担当いただき、「興味が出ました」、「モチベーションが上がりました」と言った声が寄せられ、看護研究をより身近に感じてもらうことができた。また、「看護研究の統計処理」については、本学の橋本明浩先生にエクセルだけでなく“統計専門ソフト SPSS”にも触れていただくなど、充実した演習を展開していただいた。橋本先生には、参加者個別の疑問や悩みにも答えていただき、「とても分かりやすく教えていただけた」といった嬉しい感想が多く寄せられた。

看護実践スキルアップでは、昨年引き続き近畿大学医学部附属病院の辰巳陽一先生をお招きして「Team STEPPS」の講座を開催した。参加者からは、「講師の話が楽しく分かりやすく受講できた」、「グループメンバーとも話しながら学ぶことができて良かった」といった声が聞かれた。次年度は、「充実編」として、これまで講義を聞いたことがある、または、現在既に取り組んでいるといった方々から積極的にご参加頂き、実践のレベルアップを図る講座を辰巳先生と計画中である。他には、「誤嚥を防ぐポジショニングと食事と口腔ケア」をテーマに日本赤十字広島看護大学特任教授の迫田綾子先生をお招きし、第一部に講義を、続いて第二部として実際にベッド上でのポジショニングや食事介助の演習を展開することができ

た。参加者からは、「明日から取り入れて職場でも広めたい」「食事を楽しむことを大切にしたい」など多くの感想をいただいた。

そして、本学の実習委員会と共催で開催した「看護を「教える」ということ ～実習指導と新人看護師の教育において～」の講座では、講師の内藤知佐子先生(京都大学医学部附属病院総合臨床教育・研修センター)に「指導者に求められる7つの心構え」、「指導場面で活用できる11つのコツ」について、具体的な事例をまじえて分かりやすく講義をしていただいた。参加者からは、「是非やってみようと思えるヒントがいっぱいありました。実践することを考えて、ワクワクしています」といった感想が寄せられた。

また、昨年同様に新潟県看護協会と連携し、「就職していない看護職(保健師、助産師、看護師、准看護師)の再就職を支援」するための再就職に向けた知識や技術を身につける講習会を実施した。講師陣は、臨床現場で活躍されている看護部長の他、セーフティマネージャー、感染管理認定看護師といった方々で、大変有意義な講習会を開催することが出来た。

表1 専門公開講座開催実績

区分	講座名	開催日時	受講者数	参加費	講師
最新トピックス	終末期の看取りについて	10月1日(土) 13:30～15:00	90	無料	長岡西病院 緩和ケア認定 CN 涌井裕子先生
看護研究支援	看護研究のテーマをみつけよう	5月21日(土) 13:00～16:00	14	無料	石田和子(本学)
	文献検索の基本 ～看護研究の論文を探す・入手する～	6月4日(土) 13:00～16:00	13	1,000円	高林知佳子(本学) 吉原貴子(本学)
	さあはじめよう看護研究～研究計画書の書き方まで～	6月25日(土) 13:00～16:00	12	無料	石田和子(本学)
	看護研究のための統計処理(統計専門ソフト SPSS の紹介)	9月10日(土) 10:00～16:00	6	2,000円	橋本明浩(本学)
	わかりやすいプレゼンテーションのやりかた	9月27日(火) 10:00～15:30	6	2,000円	永吉雅人(本学)
看護実践スキルアップ	患者の安全を高める Team STEPPS の導入	6月11日(土) 10:00～16:00	49	2,000円	近畿大学医学部附属病院 教授 辰巳陽一先生
	排泄ケアの援助技術 ～失禁患者さんのスキンケア～	7月2日(土) 13:00～16:00	30	1,000円	上越総合病院 皮膚・排泄ケア CN 霜田章子先生
	ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム「エンド・オブ・ライフ・ケアに関わる看護師のための研修会」	7月16日(土) 9:30～17:20 7月17日(日) 9:30～17:00	29	5,000円	酒井禎子(本学・ELNEC-J 指導者)他

看護実践スキルアップ	呼吸のフィジカルアセスメント	9月3日(土) 9:30~12:30	35	1,000円	飯田智恵(本学)
	気管吸引技術とそのエビデンス	9月3日(土) 13:30~15:30	29	1,000円	新潟県立中央病院 副看護師長 竹原則子先生
	誤嚥を防ぐポジショニングと食事と口腔ケア	10月9日(日)			日本赤十字
	第1部講義 誤嚥を防ぐポジショニングと食事と口腔ケア	10:00~12:30	99	無料	広島看護大学 特任教授
	第2部演習 ポジショニングで食べる喜びを伝える POTTプログラム	13:30~16:30	演習 32 見学 28	2,000円 —	迫田綾子先生
	自分を活かし後輩を活かすプリセプターシップ/パートナーシップのあり方	10月29日(土) 13:00~16:00	25	無料	高島葉子(本学) 岡村典子(本学)
	看護を「教える」ということ～実習指導と新人看護師の教育において～	11月26日(土) 13:30~15:30	93	無料	京都大学医学部附属 病院 総合臨床教育・ 研修センター 助教 内藤知佐子先生

2. どこカレ通信

メイト*に対する公開講座やバーチャルカレッジの周知を目的に、どこカレ通信をメイト向けに発行している。内容は主に専門公開講座の開催案内や実施報告等を中心に4回発送した。実績については、別表(表2 どこカレ通信発行実績一覧参照)にて詳細を示した。

なお、本学のリポジトリ等に収録して広く公開している。

*メイト

学びたい希望を持つ方々へ学習の機会を提供する「どこでもカレッジプロジェクト」では、ともに学習する人々をメイトと呼び、別途申請書による登録を行い、どこカレ通信をはじめ、公開講座、市民公開講座、大学院等の案内を送付した。

本年度新規加入は23名、退会3名、3月末現在メイト登録数は162名である。

表2 どこカレ通信発行実績一覧

	号名	発行日	送付部数	主な内容
1	33号	6月15日	150	近況報告と公開講座の案内、大学院入試説明会等
2	34号	9月7日	157	近況報告と公開講座の案内、上越地域看護研究及び地域課題研究の発表会案内、H29地域課題研究公募
3	35号	11月15日	160	近況報告及び「どこカレプロジェクトに関するアンケート」の結果についての一部報告
4	36号	1月20日	160	近況報告、メイト会員の特典紹介

3. バーチャルカレッジ

今年度は、当大学の渡辺隆学長の特別講義「地球の歴史とヒト(4回シリーズ)」、同じく当大学の橋本明浩先生の公開講座内容を収録した「看護研究のための統計解析入門 SPSS と Excel の紹介」が、新着教材として公開された。

また、バーチャルカレッジのプログラム見直しに向け、メイトへのアンケート調査を実施した。調査内容を踏まえて更なるバーチャルカレッジの充実と見直しに取り組んでいるところである。

4. その他

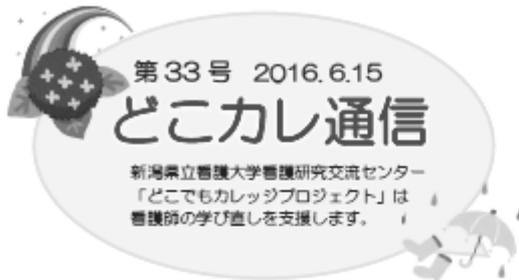
1)メイト獲得に向けた取り組み

バーチャルカレッジのトップページをリニューアルし、「簡易版：バーチャルカレッジ閲覧手順」を掲載するなど、メイトのアクセスを促すとともに、メイト獲得につなげるための工夫に取り組んでいる。

2)広報活動

看護研究交流センターご案内(リーフレット)の発送、ホームページやくびきの創信(上越タイムス)への公開講座情報等の掲載、公開講座の対象に合わせた病院や施設へチラシの送付、公開講座時にも今後の公開講座のチラシを配るなどして、積極的に情報を公開した。また、公開講座の終了後アンケートには HP に関わる設問を設け、HP の存在を周知するなどし、教員が実習などで各病院へ訪れる際にはチラシを持参し、直接公開講座への参加を促す等の活動を行った。

資料1—どこカレ通信 33号



第33号 2016.6.15
どこカレ通信

新潟県立看護大学看護研究交流センター
「どこでもカレッジプロジェクト」は
看護師の学び直しを支援します。

~~~~~

梅雨にはいり、蒸し暑さの続く日々となりました。  
皆様お元気で過ごしてでしょうか。  
この時期、暑さに慣れない時期でもあります。  
適度にエアコンなどを活用し、適切に水分を摂る  
などして、暑い時期を元気に過ごしましょう。

~~~~~

終了した公開講座の報告！

**終了した公開講座の様子を
お伝えします！**

「看護研究のテーマをみつけよう」
5月21日(土)開催

本学の石田和子教授より看護研究について講演
を行っていただきました。参加者は14名でし
た。看護師や保健師の方
などが参加しました。
研究の進め方、文献検討
の方法が具体的に良かった
など意見が寄せられました。



**「文献検索の基本
～看護研究の論文を探す・入手する～」**
6月4日(土)開催

本学の高林知佳子准教授と吉原貴子主任司書よ
り講演をいただきました。参加者は13名でした。
検索の仕方や医中誌で
は何か見られるか分か
ったなど、分かり易かつ
たと好評でした。



**「患者の安全を高める TeamSTEPSの
導入」**
6月11日(土)開催

近畿大学医学部附属病院の辰巳陽一教授より、
ご講演いただきました。参加者は49名でした。
県内各地から参加して
いただきました。分かり
易く説明され楽しく受講
できたとの意見をいた
だきました。



今後の公開講座！

受付中!!

**ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム
「エンド・オブ・ライフ・ケアに関わる
看護師のための研修会」**

講師：本学 酒井禎子 准教授 他
日時：7月16日(土)・17日(日) 9:30～17:00
定員：42名 参加費：5,000円

「呼吸のフィジカルアセスメント」 受付7/19～

講師：本学 飯田智恵 講師
日時：9月3日(土) 9:30～12:30
定員：32名 参加費：1,000円

「気管吸引技術とそのエビデンス」 受付7/19～

講師：新潟県立中央病院
副看護師長 竹原則子 先生
日時：9月3日(土) 13:30～15:30
定員：32名 参加費：1,000円

ご参加お待ち
しております!

**「看護研究のための統計処理
(統計専門ソフト SPSS の紹介)」** 受付7/25～

講師：本学 橋本明浩 教授
日時：9月10日(土) 10:00～16:00
定員：10名 参加費：2,000円

「わかりやすいプレゼンテーションのやりかた」

講師：本学 永吉雅人 准教授 受付8/9～
日時：9月27日(火) 10:00～15:30
定員：6名 参加費：2,000円

*メイトの特典「先行申込み」をぜひご利用ください!

大学院(看護学研究科修士課程)入試説明会のご案内

日時：6月25日(土) 11:00～12:00
*事前の申し込みは不要です
場所：新潟県立看護大学 大会議室

~~~~~

大学院の各コースや入試に関する全体説明の  
ほか、入試や就学に関する相談に教員がお応  
えします。大学院へ進学するかまでは明確で  
はないが、聞いてみたいという方もお気軽に  
お立ち寄りください。

~~~~~

連絡先：新潟県立看護大学 看護研究交流センター (受付時間：平日9:30～16:00)
住所：〒943-0147 上越市新南町240 電話：025-526-2822 (直通・FAX兼)
Eメール：nirin@nigata-cu.ac.jp ホームページ：http://www.nirin.jp/



資料2—どこカレ通信 34号



第34号 2016. 9. 7
どこカレ通信

新潟県立看護大学看護研究交流センター
「どこでもカレプロジェクト」は
看護師の学び直しを支援します。

終了した公開講座の報告！

**「第5回 ELNEC-J コアカリキュラム
看護師教育プログラム in 上越
-エンド・オブ・ライフ・ケアに関わる
看護師のための研修会-」**

7月16日、17日開催

参加者は29名でした。新潟県内の方のほか、
県外からも参加していただきました。

「レベルの高い講義で驚いた」「参加者の皆さん
の熱意が刺激になった」
や「がん患者だけでなく、
高齢者も対象となっている
ため勉強になった」など
意見をいただきました。



「呼吸のフィジカルアセスメント」9月3日開催

参加者は35名でした。「アセスメントのポイントが
わかってよかった」
「実際の呼吸音を聴く事
ができ、勉強になった」
などの意見をいただきました。



「気管吸引技術とそのエビデンス」9月3日開催

参加者は29名でした。「エビデンスについて自分
でもあいまいなところ
があり、改めて参考になった」
「吸引のやり方を再確認で
きた」など意見をいただき
ました。



ご参加くださった皆様、ありがとうございました！



まだ残暑が厳しい毎日ですが、いかがお過ごし
でしょうか。

一日の気温差も大きくなって、体調も崩しやす
くなります。衣服など調節して体調を崩さないよ
うにしてください。



今後の公開講座の紹介！

「終末期の看取りについて」

講師：医療法人崇徳会 長岡西病院
緩和ケア認定看護師 涌井裕子 先生
日時：10月1日（土）13：30～15：00
定員：80名 参加費：無料
申込期間：8月22日～9月21日

ぜひ
ご参加ください！

「誤嚥を防ぐポジショニングと食事と口腔ケア」

講師：日本赤十字広島看護大学
特任教授 迫田綾子 先生
日にち：10月9日（日）
申込期間：8月29日～9月29日

第1部：講義 誤嚥を防ぐポジショニングと

時間：10：00～12：30 食事と口腔ケア
定員：180名 参加費：無料
持ち物：チラシに記載あり（HPをご覧ください）

第2部：演習 ポジショニングで食べる喜びを伝える

時間：13：30～16：30 POTT プログラム
定員：39名 対象：看護職
参加費：2,000円 材料費：540円

第2部：見学

定員：26名 参加費：無料 対象：職種問わず

**「自分を活かし後輩を活かすプリセプターシップ
／パートナーシップのあり方」**

コ-ディネーター：本学 高島葉子 教授、岡村典子 准教授
日時：10月29日（土）13：00～16：00
定員：30名 参加費：無料
対象：卒後2～7年目の看護職
申込期間：9月20～10月19日

上越地域看護研究発表会・地域課題研究発表会

上越地域の看護職が取り組んだ実践・研究、県内看護職と本
学教員が共同して取り組んだ、看護実践における課題解決に
向けた研究の発表会を開催いたします！参加費無料、事前申込不要

★日時：平成28年9月24日（土）

9:30～12:30（上越地域看護研究発表会）

13:30～15:10（地域課題研究発表会）

★場所：新潟県立看護大学 第1・2ホール

たくさんの方々のご参加をお待ちしております！

平成29年度 地域課題研究 公募

皆様の現場で抱えている疑問や関心ごとなど
を、本学の教員と一緒に研究してみませんか？

【公募期間】

平成28年10月3日(月)

12月12日(月) ※午後3時必着

*10万円を限度に助成金ができます。
*看護研究交流センターHPより、
公募要領・必要書類を入手できます。



連絡先：新潟県立看護大学 看護研究交流センター（受付時間：平日9：30～16：00）

住所：〒943-0147 上越市新南町240 電話：025-526-2822（直通・FAX兼）

Eメール：nirin@nigata-cn.ac.jp ホームページ：http://www.nirin.jp/



第35号 2016.11.15

どこカレ通信

新潟県立看護大学看護研究交流センター
「どこでもカレッジプロジェクト」は
看護師の学び直しを支援します。

11月に入り、すっかり寒くなってきました。冬支度もそろそろ始める時期になってきましたが、いかがお過ごしですか。寒暖の差があり、風邪などひきやすいので体調管理に気をつけてお過ごしください。

終了した公開講座の報告

看護研究のための統計処理 (統計専門ソフト SPSS の紹介)

9月10日(土)に行われました。講師は本学の橋本明浩教授でした。今年はEXCELの基礎統計に加えて、SPSSの基本操作についても講義をしていただきました。

参加者は6名でした。「具体的に画面をみながら教えていただきわかり易かった」「実際の操作をしながら学習できたところがとてもよかった」など好評でした。



わかりやすいプレゼンテーションのやり方

9月27日(火)に行われました。講師は本学の永吉雅人准教授でした。少人数できめ細やかな指導のもと、参加者のプレゼンテーションまでをご指導いただきました。

参加者は6名でした。「パワーポイントのイメージが ついた」「今まで知りたかったことだったので学習できてよかった」と好評でした。



終末期の看取りについて

10月1日(土)に行われました。講師は医療法人崇徳会長岡西病院浦井裕子緩和ケア認定看護師でした。やさしい人柄の語りは参加者を和ませたようでした。

参加者は90名でした。多くの方にご参加いただき、「心を和らげる温かな講演でした」「日々の看護の振り返りになった」などの感想をいただきました。



アンケート結果 ご報告

6月に実施しました「どこでもカレッジプロジェクトに関するアンケート」の結果を一部ご報告いたします。

送付数 150名 / 回収数 42枚(28.0%)

インターネット環境がありますか?

ある▶41名(97.6%) ない▶1名(2.4%)

本センターのHPを見たことがありますか?

ある▶33名(78.6%) ない▶9名(21.4%)

インターネットを利用して学習することについて
どのようにお考えですか?

便利▶22名(52.4%)

やや便利▶10名(23.8%)

どちらともいえない▶9名(21.4%)

無回答▶1名(2.4%)

バーチャルカレッジを知っていますか?

知っている▶31名(73.8%)

知らない▶11名(26.2%)

バーチャルカレッジを知っていると回答された方
の中で、バーチャルカレッジのコンテンツ(動画・
テキスト等の教材)を利用し学習したことがありますか?

ある▶11名(35.5%) ない▶20名(64.5%)

メイト会員になってよかったと思うことは何ですか?(複数回答可)

公開講座の案内が送られてくる▶33名

公開講座への先行申込みができる▶17名

どこカレ通信が送られてくる▶15名

バーチャルカレッジが利用できる▶12名

特になし▶1名

無回答▶1名

※皆様からお寄せいただいた貴重なご意見・ご要望をもとに、今後の運営の参考とさせていただきます。皆様のお役に立てればと考えております。お忙しい所、アンケート調査へのご協力いただいた皆様、大変ありがとうございました。



連絡先：新潟県立看護大学 看護研究交流センター (受付時間：平日 9:30~16:00)
住所：〒943-0147 上越市新南町 240 電話：025-526-2822 (直通・FAX 兼)
Eメール：nirin@nisisata-cn.ac.jp ホームページ：http://www.nirin.jp/



資料4—どこカレ通信 36号



暦では大寒になり寒さも一層厳しくなってきましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。今年度最後のどこカレ通信です。インフルエンザや感染性胃腸炎など感染症の流行時期でもあります。手洗いやうがいなどで予防を行い、健康に過ごしていきましょう。

終了した公開講座の報告

誤嚥を防ぐポジショニングと食事と口腔ケア

10月9日(日)開催



日本赤十字広島看護大学 特任教授迫田綾子先生をお招きして、講義と演習の講演を行っていただきました。参加者総数99名でした。

参加者からは、「実例がありわかり易かった」や「ポジショニングの大切さと食事のスプーンの動かし方などが学べた。わかり易い内容だった。」など好評でした。

自分を活かし後輩を活かすプリセプターシップ/パートナーシップのあり方 10月29日(土)開催

コーディネーターは本学の高島葉子教授と岡村典子准教授でした。パネリストとして、新潟県内の病院に勤務する方々からお越しいただき、日ごろの新人教育の様子や取り組みについてお話頂きました。また、参加者の方々のグループディスカッションも行い有意義に過ごしました。

参加者からは、「実体験を踏まえた話をたくさん聞いた」や「新人指導時のかわり方を学ぶことができた」と好評でした。



看護を「教える」ということ -実習指導と新人看護師の教育において-

11月26日(土)開催



京都大学医学部附属病院総合臨床教育・研修センター助教内藤知佐子先生より講演していただきました。この講演は本学の実習委員会と共催で行い、日ごろから実習指導を行っている方々にもご参加いただき開催されました。参加者は93名でした。

「わかり易く楽しく受けることができた」「新人教育に関わっているので、学んだことをプリセプターやスタッフに伝え新人指導に役立てたい」とご意見をいただきました。

お知らせ

平成29年度
公開講座の準備中!!

現在、次年度の公開講座の開催に向けて、計画を立てているところです。メイト会員の皆様には、4月上旬頃、公開講座一覧(本センターリーフレット)をお届けいたします。

関心のあるテーマ、参加を希望する講座を見つけたら、年間計画に盛り込んでいただき、ぜひご参加ください☆

メイト会員の特典

次年度も引き続き行います!

★どこカレのインターネットを利用して学習ができるプログラム「バーチャルカレッジ」HPが、見やすくなりました。また、今年度の新規コンテンツもアップされております。ぜひ今一度、本センターHPよりバーチャルカレッジをのぞいてみてください!ぜひ、感想をお待ちしております!

※ID・パスワードが不明な方、利用方法のお問い合わせなどは、遠慮なく下記までご連絡ください。

★メイト会員の皆様には、各講座への一般申込期間より1週間早くお申込みいただけるようになっております。すぐに定員になってしまう人気の講座への参加をご希望の場合は、ぜひ先行申込みをご利用ください!

連絡先: 新潟県立看護大学 看護研究交流センター (受付時間: 平日 9:30~16:00)

住所: 〒943-0147 上越市新南町 240 電話: 025-526-2822 (直通・FAX 兼)

Eメール: nirin@nigata-cn.ac.jp ホームページ: http://www.nirin.jp/



地域課題研究開発部門

飯吉令枝、石田和子、河原畑尚美、井上智代、北村千章

I 本部門の事業目的

大学職員と地域の医療機関看護職員の共同研究である地域課題研究や、上越地域の看護研究の発表の場である上越地域看護研究発表会の開催を担う。

II 活動概要

1 平成 28 年度上越地域看護研究発表会の開催

上越地域の看護職の連携を図る目的で、新潟県立看護大学看護研究交流センターと新潟県上越地域振興局健康福祉環境部の共催で開催した。

1) 上越地域看護研究発表会の準備

発表会開催にあたり、新潟県上越地域振興局健康福祉環境部が窓口となり上越地域の病院の看護師 7 名を加えた実行委員会が編成され、発表会前に 2 回(5 月 16 日と 7 月 25 日)の委員会が開催された。実行委員会では、会の企画と今後の進め方および当日の役割分担を検討した。演題の査読を新潟県立看護大学地域課題研究開発部門が担当した。

2) 平成 28 年度上越地域看護研究発表会(平成 28 年 9 月 24 日(土)9:30~12:10)

テーマは「広げよう!!上越の看護」とし、新潟県立看護大学第 1・第 2 ホールで、すべて口演形式で実施した。演題は 13 題、参加者は 119 名であった。

また業者の協力を得て、当日は展示ブースを設けた。

当日のプログラムは以下の通りであった。

口演 第 1 群 9:40~10:10	
座長 浅井正子(上越地域振興局健康福祉環境部)	
研究	1-1 自ら開放観察を中止する患者の思い ○佐藤 暁(さいがた医療センター)
研究	1-2 デイケア活動を通して断酒継続に至った女性メンバーとの関わり ○石田美喜子(三交病院)
研究	1-3 身体拘束体験を通して精神科看護師が感じる苦痛 ○杉山新太郎(さいがた医療センター)
口演 第 2 群 10:15~10:45	
座長 小林 薫(新潟労災病院)	
実践報告	2-1 PNS 導入後の新人教育の課題 ○吉田民子(新潟県立中央病院)
実践報告	2-2 接遇に関する自己評価調査からみえた課題 ○大木明美(川室記念病院)
実践報告	2-3 倫理的ジレンマを経験した A 氏への看護を振り返る ○藤ノ木陽子(新潟県立中央病院)
口演 第 3 群 10:55~11:35	
座長 丸田好子(新潟県立中央病院)	
研究	3-1 整形外科患者における睡眠導入剤使用状況について ○小竹 雄(新潟県立中央病院)
研究	3-2 交代勤務労働者の飲酒行動の特徴と問題飲酒に関連する要因の検討 ○山田知佳(新潟県福祉保健部医師・看護職員確保対策課)
研究	3-3 内視鏡的粘膜下層剥離術の「術前・術後訪問」の有用性についての検討 ○松山エミ(新潟労災病院)
実践報告	3-4 整形外科病棟における高齢者のせん妄発症の実態調査 ○渡辺元気(上越総合病院)

口演 第4群 11:40~12:10

座長 河原畑尚美(新潟県立看護大学)

実践報告 4-1 認知症患者ケアの取り組み「ほのぼのタイム」の実践報告

○島田まゆみ(上越地域医療センター病院)

実践報告 4-2 経鼻経管栄養から自立経口摂取への取り組み

○市村奈津枝(知命堂病院)

実践報告 4-3 認知症病棟における薬品の剤形・規格変更の取り組み

○清水和美(高田西城病院)

3)上越地域看護研究発表会のアンケート結果および実行委員会での反省・評価

(1)アンケート結果

アンケート回収数は80名で回収率67.2%であった。

初めて参加した人が37名(46.3%)で、発表会を何で知ったかでは「職場の回覧」が41名(51.3%)と最も多く、次いで「ポスター・チラシ」21名(26.3%)、「上司に勧められた」20名(25.0%)であった。参加動機は「開催地・会場が上越だったから」が33名(41.3%)と最も多く、次いで「演題発表者が知り合いだったから」が28名(35.0%)であった。

発表については「適切だった」が76名(95.0%)で、満足度は「満足」「やや満足」が75名(93.8%)あった。感想・意見として、「身近なテーマであり、同じ上越地域で働く看護師の活動を知ることができてよかった」「看護サービスの質向上に看護実践をつなげていく重要性を改めて認識した」などの声が多く聞かれた。その一方「事前に資料があるとわかりやすい」「パワーポイントが見つらい発表がいくつかあった」「もう少し多くの人に聞いてもらえるような良い方法があるとよい」など今後の課題となる意見も出された。

(2)実行委員会反省会

発表会後に1回(10月20日)の委員会が開催された。

「発表内容は年々充実してきている。」との意見が出されたが、その一方参加者が少なかったため、次年度は、実行委員のいる病院ではもう少し委員が院内でアピールすることや、小さい病院や施設関係者にはピンポイントで声かけをしていくなどの案が出された。また、受付方法や会場の案内など次年度に向けて改善策が出された。

なお平成29年度は9月30日(土)に開催することとなった。

2 平成27年度地域課題研究発表会の開催

昨年同様、上越地域看護研究発表会と同日に開催した。平成27年度の地域課題研究発表会の演題は8題、参加者は66名であった。プログラムは以下の通りであった。

(平成28年9月24日(土)13:30~15:10)

<第1群> 座長 井上 智代(新潟県立看護大学)

1. 糖尿病患者の冬期間の運動療法に関する実態調査

(独)労働者健康安全機構新潟労災病院 金井ちづる

2. 苦痛をかかえるがん患者への緩和ケア認定看護師が実施した相談内容と介入

(独)労働者健康安全機構新潟労災病院 小池陽平

3. 息子による介護と退院支援に関する研究

(独)労働者健康安全機構新潟労災病院 村田悦子

4. プリセプター制度の現状と課題

新潟県立中央病院 小宮山陽子

<第2群> 座長 北村 千章(新潟県立看護大学)

5. PNS導入における患者満足度への効果

新潟県立中央病院 鬼形聖子

6. 切迫早産の入院治療により長期臥床を要する妊婦が求める看護ケア
新潟県立中央病院 青木美佐子
7. 精神科病院における精神科看護技術と職業経験評価に関する実態調査
新潟県立精神医療センター 佐々木美奈子
8. 急性期脳血管障害の看護計画に FIM を導入した効果
長岡赤十字病院 神保佳枝

1) 地域課題研究発表会のアンケート結果および部門内での反省・評価

(1) アンケート結果

アンケート回収数は 41 名で回収率 62.1%であった。

初めて参加した人が 24 名(58.5%)で、参加動機は「演題・プログラムに興味があったから」が 19 名と最も多く、次いで「共同研究者になっているから」が 11 名であった。満足度は「満足」「やや満足」が 37 名(90.2%)あった。感想・意見として、「とても勉強になった」「これからも看護研究のために継続してほしい」「せっかくの機会なので一般の看護師がもっと多く参加するようになると思う」「事前に抄録を読む時間があるともう少し理解できたと思う」などが出された。

(2) 部門内での反省会

上越地域看護研究発表会、地域課題研究発表会を土曜日に同日開催するようになって 8 年目であるが、午前参加者で午後まで残る人が少ない状況が続いており、参加者の確保が今後の課題である。

3 平成 28 年度地域課題研究の申請状況

10 件の地域課題研究の申請が採択された。後に 1 件辞退あり、9 件の研究が進行中である。

申請者	所属	学内教員	研究テーマ
古市麻由子	長岡赤十字病院	飯田智恵	慢性心不全患者が再入院に至った生活行動における問題点 ー高齢者世帯の患者の自己管理に関する語りを通してー
中村幸恵	さいがた医療センター	永吉雅人	A 病院における、勤務計画表作成の現状把握 ーメンバーシップの視点からー
飯塚文恵	ライフサポートゆう	原 等子	A 地域における在宅療養支援につなぎ支える多職種連携教育の効果
廣田光恵	糸魚川総合病院	岡村典子	整形外科入院患者における尿路性敗血症発生率低減に向けた看護への取り組み
室岡真樹	新潟県庁 人事課	平澤則子	中堅保健師が行う保健事業の展開における課題 ーPDCA を用いた事例検討をとおしてー
小坂智恵子	パナソニック(株)エコソリューションズ社新潟工場	井上智代	社員食堂からの健康情報発信により行動変容を促す ーカリウムの効果についての情報発信を通じてー
三浦一二美	長岡中央総合病院	石田和子	乳がん患者が放射線治療で受ける放射線性皮膚炎の照射部位別経時的変化
佐藤祐子	長岡赤十字病院	小林綾子	B 病棟看護師の糖尿病運動療法指導の課題
鈴木咲子	長岡赤十字病院	谷内田潤子	結核病棟における外国人患者への看護実践

4 平成 29 年度地域課題研究の応募

作成した公募要領を新潟県内の保健・医療・福祉関係(約 500 か所)に郵送するとともに、新潟県立看護大学看護研究交流センターホームページに掲載し、地域課題研究公募の広報活動を行った。

公募期間中(平成 28 年 10 月 3 日(月)～12 月 12 日(月))に公募が 3 件で、平成 28 年 12 月 13 日(火)～平成 29 年 1 月 23 日(月)まで再公募を行うこととなった。

Ⅲ 平成 28 年度の評価と今後の課題

1)上越地域看護研究発表会、地域課題研究発表会について

上越地域看護研究発表会、地域課題研究発表会は同日開催にして 8 年目になるが、参加者が年々減少傾向にある。今後、広報活動を引き続き行っていくとともに、参加者を増やすための発表会の運営についての検討を行っていく必要がある。

2)平成 29 年度地域課題研究の応募について

公募締め切りまでに応募が少なかったため、昨年度同様再公募を行うこととなったが、目標の 10 件の応募がなかった。今後は、多くの施設から応募してもらえるよう、広報活動を工夫していく必要がある。

特別研究部門

永吉雅人、平澤則子、野村憲一、高柳智子、高島葉子、原等子、飯吉令枝、
小林綾子、井上智代、エルダトン・サイモン、山田真衣

I 特別研究部門の経過

特別研究部門は、2010年(平成22年)1月に上越で行われた移動知事室において本学渡邊学長から「都会で生活している人たちが、上越地域の自然に触れ、人々と交流しながら健康な生活と安心できる福祉を考えるきっかけをつくる事業」としてメディカルグリーンツーリズムが提案され、平成22年度より活動を開始している。一昨年度より、「メディカルグリーンツーリズム」、「卒業生支援」、「地域政策課題」の研究グループを発足し、さらに今年度「メディカルグリーンツーリズム」を実際の活動に合わせた「地域健康支援」に名称を変えて、3つの研究グループでもって活動している。

II 各研究グループの活動

次章より平成28年度特別研究部門の活動報告として、「地域健康支援」、「地域政策課題」、「卒業生支援」について、それぞれの主たる担当メンバーが報告する。

特別研究部門では、例年のことであるが、調査・研究ということもあり予定通りに進まないことが多くあった。それにも関わらず、粘り強く活動し、一定の成果を挙げて頂いた各グループリーダーをはじめメンバーの皆様、またご理解とご協力を頂いている本学看護研究交流センター関係者の皆様に感謝申し上げます。最後に地域の皆様のご協力に改めて感謝申し上げます。

III 地域健康支援

小林綾子、山田真衣

1 活動概要

「地域健康支援」は、上越地域の自然環境と医療・看護・福祉に関する資源を用いて、地域の活性化と人々の健康な暮らしを目的として活動する自治体と大学の窓口となり協力することを目的として活動を行っている。

平成28年度は、妙高市より依頼のあった、「宿泊型新保健指導プログラム(妙高高原健康ツアー)」及び、「健康教室(妙高市主催)」における計測補助、計測データと血液データの分析を行った。すべての分析結果は、妙高市担当者に報告した。

2 「宿泊型新保健指導プログラム(妙高高原健康ツアー)」における計測補助と、計測データ・血液データの分析

「宿泊型新保健指導プログラム(妙高高原健康ツアー)」は、厚生労働省のモデル事業として平成27年度～28年度に実施されたものである。平成28年度は、7月2日(土)、3日(日)に1泊2日で実施され、妙高市職員とともに、看護大学担当者2名と学生ボランティア4名で参加者13名の計測補助を行った。その後、参加者は、市職員により約6か月間フォロー

ーアップされ、12月17日(土)に6か月後の計測が行われ、看護大担当者1名が計測補助を行った。参加者の計測データと血液データの分析を行い、妙高市担当者に分析結果を報告した。

3 健康教室(「健康保養地プログラム ヘルスアップクラブ」)1期(6月6日～8月5日)における計測補助

計測は、6月6日(月)と、8月5日(金)に行われ、妙高市職員1名とともに看護大担当者2名で参加者の計測を行った。

4 健康教室(「健康保養地プログラム ヘルスアップクラブ」・「健康リフレッシュ教室」)参加者の計測データの分析

各健康教室1期と2期の計4つの健康教室で実施したプログラム前後に計測した参加者のデータを分析し、妙高市担当者に分析結果を報告した。

IV 地域政策課題

高柳智子、飯吉令枝、井上智代、野村憲一、平澤則子

1 地域政策課題グループの活動目的

本グループは、新潟県の各地域が「健康・福祉のまち」として充実していくための課題を、県内の行政・関係諸機関と協働して政策的にまとめていくことを活動目的とし、平成26年度に発足した。

2 平成28年度活動概要

新潟県内の行政および関係諸機関への当グループのチラシ配布及びグループメンバーによる呼びかけを行い、広報活動に努めた。その結果、今年度は下記の2つの課題について、県内の公的機関と協働して取り組むことができた。

①新潟県立中央病院地域連携センターとの共同調査

平成28年度の診療報酬改定により、従来の退院調整加算に代わって退院支援加算が新設された。制度改正に伴う病棟看護師の退院支援活動の現状と課題を把握し、退院支援体制をより充実させるための基礎資料を得ることを目的として、質問紙調査ならびにグループインタビューを計画し、実施中である。データ分析後、病院地域連携センター職員と協議し、調査結果報告ならびに今後の退院支援体制への提案を行っていく予定である。

②長岡市山古志支所との共同調査

長岡市山古志地域に暮らす高齢者への保健活動の示唆を得る目的で、同市山古志支所保健師と共同で調査を計画中である。平成29年度実施に向けて準備を進めている。

V 卒業生支援

高島葉子、永吉雅人、原等子、エルダトン・サイモン

1 活動概要

卒業生支援グループでは、新潟県立看護大学における卒後動向の把握および卒業生の支援ニーズを明らかにし、卒業生支援のための基礎資料とすることを目的として調査を実施した。そこで、調査の詳細および結果を資料1・資料2に報告する。

「資料1－調査報告」

卒業1～3年目の卒業生を対象とした新潟県立看護大学における卒業生支援のための
卒業動向の把握および支援ニーズ調査

新潟県立看護大学看護研究交流センター 特別研究部門卒業生支援グループ
高島葉子, 永吉雅人, 原等子, エルダトン・サイモン,
長谷川ヒデ子, 加城貴美子 (平成27年度まで)

I 調査の趣旨

新潟県立看護大学(以下、本学)は、1994年(平成6年)4月新潟県立看護短期大学を前身として2002年(平成14年)4月に開学した。新潟県内における他看護系3大学が新潟市を中心としているのに対し、上越地域唯一の看護系大学として地域の医療従事者の供給に貢献してきた。

2006年3月～2016年(平成28年)3月までに本学を卒業した学部生は約1,000人であり、卒業生は県内外で活躍している。

本学では、卒業までの就職・進学に関する支援は開学時から教務委員会や学生委員会、2005年(平成17年)度以降は国家試験対策就職委員会、4年次の専門ゼミナールなどにおいて組織的・個別的にきめ細やかになされてきた。しかし、卒業後に対しては、組織的な支援体制は構築されてこなかったため、2015年(平成27年)から看護研究交流センター事業として、卒業1・2年目を対象とした茶話会(大学祭時に開催)や卒業7年目までを対象としたプリセプター研修(どこでもカレッジ公開講座として開催)を実施するに至った。茶話会や研修では新人看護職として、仕事を継続していくうえでの喜びや困難などの切実な声が明らかとなった。

積極的に卒業生支援体制を構築している先行公立大学として三重県立看護大学と岐阜県立看護大学がある。三重県立看護大学では、卒業生の実態調査(日比野ら, 2009)からニーズとして明らかとなった「転職・再就職情報」、「卒業生ネットワーク」、「看護に関するトピックスに対応した研修」、「メンタルサポート」、「研究支援」など卒業生のための就職・キャリア支援(三重県立看護大学地域交流センター, 2014)を先駆的に実施している。岐阜県立看護大学でも、卒業生が仕事上の不安や悩みを気軽に相談できる就業・キャリア支援として、全学的な相談支援体制をとっている(岐阜県立看護大学看護研究センター, 2014)。

新潟県内看護基礎教育機関を2007年以降に卒業し、県外に就職した者の就業状況等実態調査によると(高林ら, 2012)、回答のあった244名(回答率29.8%)のうち、中でも大学を卒業した後に望む支援として、「職務に役立つ研究や講演会開催」、「転職や進学についての支援」、「悩んだ時に気軽に相談できる窓口」、「図書館の開放」、「看護研究の支援」を望んでいることが明らかとなった。この調査は新潟県内の大学卒業生の県外就職者のニーズであるが、本学卒業生のニーズの一端としてもうかがい知ることができた。

就職後数年間は思い描いていた職場と実態とのギャップに悩み、職場適応の困難さなどにより早期離職し、看護職の人材確保が困難な現状から、「保健師助産師看護師法」の改正により2010年から新人看護職員の卒業研修が義務化されるなど、多くの病院・施設においては積極的な離職防止の対策がとられるようになった。卒業後、本学の卒業生が職場においてどのような実態にあるのかについては具体的なデータが今までなかったため、卒業生の大学への支援ニーズが明らかとなっていない。

そこで、新潟県立看護大学における卒業動向の把握および卒業生の支援ニーズを明らかにし、卒業生支援のための基礎資料とすることを目的として調査を実施した。

II 調査方法

新潟県立看護大学を2013年～2015年度に卒業した者のうち、大学に連絡先の開示を同意した卒業生82名を対象に、2016年9月に郵送法により卒業生支援のための卒後動向の把握および支援ニーズに関する質問紙調査を実施した。本調査は新潟県立看護大学看護研究交流センター事業の一環として実施した。

対象者への依頼文には、卒業時に連絡先を大学に開示している者への調査であること、調査協力の任意性、回答の自由意思の尊重、無記名であり個人特定されないこと、調査票は統計処理を行い、結果の本学ホームページ等での公表予定、調査票の返送をもって同意とすることを明記した。

1. 調査デザイン

質問紙調査

2. 対象者

2013～2015年度に本学を卒業した者のうち、大学に連絡先の開示を同意した卒業生82名である。

3. 調査内容

新潟県立看護大学における卒業生支援のための卒後動向の把握および支援ニーズ調査（資料1）にもとづき、(1) 基本的属性、(2) キャリアの中断に関係する項目、(3) 卒後支援として大学に期待すること、(4) 大学院等進学の希望の有無と内容について調査を実施した。

4. 調査期間

2016年9月1日にアンケートを郵送し、9月30日までの回収としたが、回答が少なく9月末に再度アンケートへの協力を依頼する文書を送付し、10月中旬までに回収した。

5. 分析方法

調査項目ごとの記述統計及び自由回答については質的に分析を行った。

6. 倫理的配慮

本調査は、看護研究交流センター事業の一環として実施した。

また、以下の点に留意して調査を実施した。

- 1) 対象者の調査参加に対する利益と不利益：想定される利益としては、調査に協力することにより、自身のキャリアを想起し、今後のキャリア形成に向けた熟考の機会となる。また、調査結果により、本学におけるキャリアに関する支援を直接的・間接的に受けることができる可能性がある。想定される不利益としては、調査用紙に記入する作業に5～15分程度を要する。キャリア形成の際に生じた不愉快な思いを想起する可能性がある。これに対しては、調査協力の自由意思を保証した。
- 2) 対象者の選定手続きの公平さ：対象者は2013～2015年度に卒業した大学に連絡先の開示を同意した卒業生82名であり、選定の合理性はある。卒業生全体の意見をすべて網羅できるわけではないが、支援ニーズの一端は把握できるものと考えた。
- 3) 対象者への説明と同意：対象者には、調査票の返送をもって同意とすることとし、調査の目的、趣旨、参加協力における自由意思の尊重、参加協力しない自由の保証、無記名による匿名性の担保、回収された調査用紙の取り扱いとしては、対象者が特定されないナンバリングによる管理の保証、回答の本調査目的以外の使用はしないこと、プライバシーの保護について十分留意することを調査依頼文に明記した。また、調査内容として、年齢や所属先の詳細など個人が特定される情報は取り扱わない。本調査の分析方法および結果の公表について、本学ホーム

ページ、報告書等に掲載予定であることの詳細を得た。

- 4) 情報の管理：調査結果は、共同調査者で共有する以外は、他者の目に触れない場所に保管し、調査終了後は確実に破棄することを保証した。

III 結果

1. 回収率

調査用紙は 82 名に送付、23 名から回答があった（回収率 28.0%）（表 1）。

表 1 回収率

	2013 年度卒業生	2014 年度卒業生	2015 年度卒業生	合計
卒業生数	91 名	92 名	95 名	278 名
送付	33 名	25 名	24 名	82 名
回収 (回収率)	12 名 (36.4%)	7 名 (28.0%)	4 名 (16.7%)	23 名 (28.0%)

2. 対象者の背景

対象者の概要は表 2 に示した通りである。出身地は新潟県が 87%を占めているが、県内で業務にあたる者は約 60%であった。

表 2 対象者の背景 (名) n=23

性別		出身地		現在の就業地	
女性	男性	新潟県内	新潟県外	新潟県内	新潟県外
19	4	20	3	14	9
82.6%	17.4%	87.0%	13.0%	60.9%	39.1%

3. 現在の免許取得状況 (複数回答)

免許取得状況 (表 3) は、看護師・保健師の免許保有者 91.3%、看護師・保健師・助産師の免許保有者 8.7%、養護教諭の免許を有しているものは 4.3%だった。

表 3 現在の免許取得状況 (名) n=23

①看護師	23	100.0%
②保健師	21	91.3%
③助産師	2	8.7%
④養護教諭	1	4.3%
⑤修士号	0	0.0%

4. 最初の就業先 (主たるもの)

1) 最初の就業先

最初の就職先 (図 1) は、病院に看護師・助産師として就職した者が 74%、保健師として行政に就職した者が 17%であった。

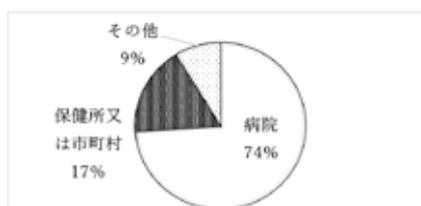


図 1 最初の就業先 n=23

2) 就業先の配置場所の状況

回答者の勤務配置場所（表4）は、保健師として行政に勤めている者は市町村役場内の部署および地域包括支援センターであった。看護師として勤務している者は全員が病院の病棟勤務であり、単科の病棟勤務は精神科、小児科、産婦人科、新生児科の他、集中治療室、循環器・脳卒中センターという高度救急医療を担う病棟、消化器内科、整形外科、身体合併症内科などであった。また、混合病棟での勤務者が多く、内科・外科、内科・皮膚科・耳鼻科との混合病棟などの勤務者もいた。

表4 最初の勤務配置場所

行政	自治体	役場
		地域課
		こども課
	地域	地域包括支援センター
病院	産婦人科	産婦人科
		産婦人科 乳腺外科
	小児	小児科
		新生児科(NICU・GCU)
	精神	精神科(スーパー救急病棟)
	超急性期	ICU
		循環器病・脳卒中センター
	単科	整形外科
		消化器内科
	混合	脳神経内科・整形外科・感染症の混合病棟
		循環器・心臓血管外科・救急科病棟
		循環器内科・心臓血管外科・消化器内科・外科
		呼吸器内科・血液内科・腎臓内科・皮膚科
		呼吸器内科・皮膚科・耳鼻科
		消化器内科・放射線科
内科(内分泌・腎臓)・循環器内科		
身体合併症内科		

3) 通算就業年数

回答のあった23名のうち、21名(91.3%)は卒業後看護職として就業を継続中であった。回答者のうち2名(8.7%)が0か月であり、看護職として就業していなかった。また、回答者のうち就業先を変えた者はいなかった。

表5 通算就業年数

2年5か月	12	52.2%
1年5か月	6	26.1%
5か月	3	13.0%
0か月	2	8.7%

5. 就業1年以内に業務遂行上感じた困難の経験の有無

1) 困難の経験の有無

回答者のうち、卒後1年未満に業務遂行上の困難を経験したことがある者は20名(90.9%)であった(表6)。

表 6 困難の経験の有無 (名) n=22

①経験あり	20	90.9%
②経験なし	2	9.1%

2) 困難さの内容 (複数回答)

経験した困難の内容 (表 7) は、看護技術不足が 70.0%、自分の勉強不足 60.0%、実習での経験不足 35.0%と、多くの回答者が困難は自分に起因したものであると自覚していた。また、医療機器装着未経験 40.0%、実習で未経験科へ配属が 20.0%、大学での基礎科目の履修不足 5.0%と、大学での学びとの関連で経験や知識が不足していると考えていた。さらに、先輩看護師や職場での人間関係 30.0%、患者様とのコミュニケーションの未熟さ 15.0%と、患者様を含めた職場での人間関係が困難であると考えていた。

表 7 困難さの内容 (名) n=20

看護技術不足	14	70.0%
実習での経験不足	7	35.0%
実習で未経験科への配属	4	20.0%
医療機器装着未経験	8	40.0%
大学での基礎科目の履修不足	1	5.0%
自分の勉強不足	12	60.0%
患者様とのコミュニケーションの未熟さ	3	15.0%
先輩看護師や職場での人間関係	6	30.0%
その他	2	10.0%

3) 困難さの克服の仕方 (複数回答)

困難さの克服の仕方としては (表 8)、「勉強した」が 65.0%、「研修や学会等に参加した」が 5.0%と自己研鑽による克服がなされていた。また、「上司・同僚などに相談した」、「同期の同僚に相談した」が各 35.0%、「友人に相談した」「親に相談した」が各 10.0%など、誰かに相談することができていた。「大学の先生に相談した」は 0%であった。さらに、「自分なりのストレス解消法を見出した」が 20.0%であった。これらは、卒業生本人の個人的努力で克服できたものだが、「ひたすら耐えた」が 20.0%、さらに「まだ克服していない」が 10.0%おり、卒業生自身の努力だけでは克服できていない状況があった。

表 8 困難さの克服の仕方 (名) n=20

勉強した	13	65.0%
上司・同僚などに相談した	7	35.0%
同期の同僚に相談した	7	35.0%
親に相談した	2	10.0%
友人に相談した	2	10.0%
大学の先生に相談した	0	0.0%
研修や学会等に参加した	1	5.0%
自分なりの困難対処法・ストレス発散を見出した	4	20.0%
ひたすら耐えた	4	20.0%
退職・転職した	0	0.0%
まだ克服していない	2	10.0%
その他	1	5.0%

6. 求められている役割・立場

現在の職場における役割や立場（表 9）は、スタッフ以外にプリセプター、実習指導など後輩指導を担っている者、委員会、研究チームの一員として職場の質向上に関与する立場にいる者もいた。

表 9 求められている役割・立場（名） n=22

一般スタッフ	20	90.9%
リーダー	0	0.0%
プリセプター	3	13.6%
委員会	2	9.0%
実習指導	1	4.5%
研究チーム	1	4.5%
その他	1	4.5%

7. 検討しているキャリア

検討中のキャリアアップ（表 10）は、認定看護師や専門看護師、修士などを志望している者がいた。

表 10 検討中のキャリア（名） n=23

認定看護師	2	8.7%
専門看護師	1	4.3%
修士	1	4.3%
博士	0	0.0%
その他	7	30.4%
無回答	12	52.2%

8. もっと学んでおきたかった科目（複数回答）

大学でもっと学んでおきたかった科目（図 2）は、形態機能学が 52.2%と最も多く、次いで臨床病態学と臨床薬理学が 39.1%、看護学が 26.1%であった。

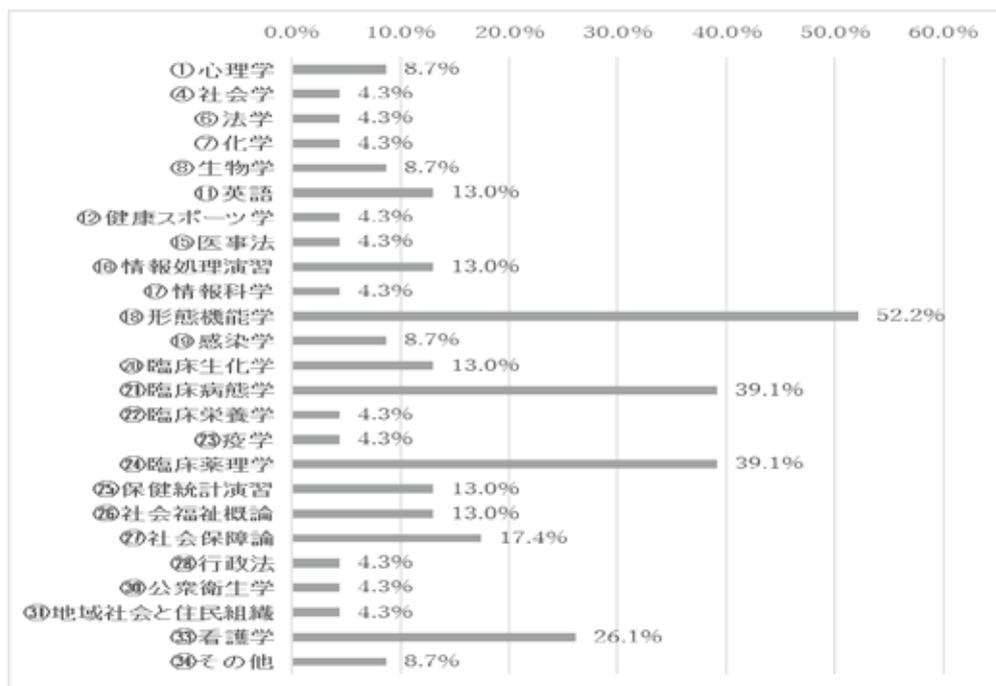


図 2 もっと学んでおきたかった科目

9. 卒業支援として大学に期待すること（3つまで）

大学に期待している卒業支援（表 11）は、看護に関するトピックスに対応した研修 47.8%、研究支援の講座等の開設 21.7%であった。次いで多かった項目は、転職・再就職情報 39.1%、卒業生のネットワーク 26.1%、メンタルサポート 13.0%であった。

表 11 卒業支援として期待すること（名） n=23

①看護に関するトピックスに対応した研修	11	47.8%
②事例のまとめの支援窓口	2	8.7%
③研究支援の講座の開設	5	21.7%
④個人研究の支援	1	4.3%
⑤メンタルサポート	3	13.0%
⑥転職・再就職情報	9	39.1%
⑦進学相談	2	8.7%
⑧卒業生ネットワーク	6	26.1%
無回答	3	13.0%

10. 卒業後の本学研修・講座への参加の有無

卒業後に本学において開講された研修会や講座などへの参加の状況として（表 12）は、参加したことのある者は 13.0%であった。

表 12 卒業後の本学研修・講座への参加の有無（名） n=23

① ある	3	13.0%
② ない	20	87.0%

11. 本学大学院進学を検討

本学大学院への進学を検討している者は（表 13）、8.7%であった。

表 13 本学大学院進学を検討（名） n=23

① いる	2	8.7%
② いない	21	91.3%

12. 卒業生支援や大学に希望すること（自由記述）

自由記述の卒業生支援や大学への希望として（表 14）は、学習支援に関すること、相談体制およびネットワークやキャリアに関する情報提供に関すること、本学への思いが記載されていた。

表 14 卒業生支援や大学に希望すること（自由記述）

学習支援
・時折送られてくる研究や勉強会など興味深いものばかりで参加したいと思うが、現勤務先が近くではないので気軽に参加できないため残念である。
・公開講座は都合がつかずこれまで参加できなかったが興味あるテーマが多い。継続して欲しい。
相談体制およびネットワーク
・気軽に先生に相談できるネットワークなどがあれば嬉しい。
・遠くに就職しても、大学や卒業生とのつながりが持てるような仕組みを作って欲しい。
キャリアに関する情報提供
・卒業後、転職や進学を考える人も多いと思うので、看護大で情報提供のようなサービスがあれば助かる。
本学への思い
・卒業後看護大で勉強できて良かったと思うことが多く、いつか看護職として何か恩返しをしたい。

IV 考察

本学における2013～2015年度の卒業生278名のうち、連絡先の開示を同意した卒業生82名に調査を実施した。278名中23名(8.3%)ではあるが、卒業生のおかれた現在の状況を把握できる貴重な資料となった。

1. 卒業生の卒後動向について

回答者の卒後動向としては、回答のあった者がいずれも卒後就職した職場を変えず現在も就業中であること、卒後就職した職場を変更した者はいなかったこと、何らかの理由で卒業後に看護職として就職していない者がいたことが分かった。また、看護師として就業中の者のうち、業務上の困難を感じた経験がある者が9割以上おり、そのうちまだ克服できていないと回答した者がいた。この結果は、大学に卒後の連絡先を開示した者のうち、調査票を返送してきた者の現状である。

回答者は職場でスタッフとして働くとともに、卒業後1～3年目であってもプリセプターや実習指導などの後輩指導に携わる機会を得ており、さらに、委員会や研究チームの一員としての活躍が期待されるなど現場の看護の質向上に寄与する役割が求められていた。

2. 卒業生の支援ニーズについて

回答者のほとんどが業務上の困難を感じていた。困難の種別としては自身の知識や技術不足に起因すると自覚する者が多いこと、大学で学習しきれなかったことに起因する困難さを感じている者も多いこと、患者様や職場での人間関係やコミュニケーションに関することに課題を感じている者もいることがわかった。日比野ら(2009)の三重県立大学の卒業生の調査においても就職して1年未満に86%が困難を経験しており、困難の内容としては同様の結果であった。このような困難の克服の方法としては、自己研鑽や誰かに相談する、自分なりのストレス解消法があるなど、自助努力で対処している者がいる一方で、ひたすら耐え、まだ克服していないと回答した者がいることに注視したい。大学の先生に相談したという回答はなかったが、教職員による卒業生支援の必要がないということではない。実際、時折相談に訪れる卒業生に対して教職員は個別に対応しており、大学として卒業生の相談を受け入れる土壌はあると考える。

また、困難の内容が知識や技術の不足、大学で学習しきれなかった機器の操作の習得や実践での経験不足などがあることから、在学時におけるカリキュラムや教育方法などの検討が必要なことが示唆された。

さらに、回答者の配属場所は実に多様であり、専門性が高い病棟や混合病棟への配属者が多かった。この実情は、卒後きわめて早期に、専門領域の深い学習や広範囲の分野における学習が配属先の状況により要求されることを示している。大学における学びに加え、配属先に適した学習を積み重ねられるセルフマネジメント能力が要求されていると言え、このような状況で学習に対する困難を感じるのは当然である。在学時にもっと学んでおきたかった科目として、形態機能学、臨床病態学、臨床薬理学、看護学全般に関して多くの回答があったことは、配属場所における専門的な業務を遂行するにあたり、必要不可欠な知識として改めて認識した結果と考えられる。大学として卒業生に対する学習支援の必要性について検討するとともに、在学生に対してもこれらの科目の重要性を伝え、学習への動機づけが必要であることが示唆された。

自由記述から、大学や教員と繋がりを希望していることも明らかになった。これらのニーズに対しても対策を検討する必要がある。大学に相談窓口は設置されたが、活用がなされていない。活用のしやすさや周知の工夫が必要である。大学は直接支援だけでなく、臨床が新人をより良い環境で育成していくための側方支援も考えていく必要があることが示唆された。

3. 卒後支援として大学に求められていること

県外に就職した新潟県内の看護系大学と専門学校の卒業生を対象とした就業状況等実態調査(高

林ら, 2012) では、大学卒業生の望む卒業後の支援として、「職務に役立つ研究や講演会開催」、「転職や進学についての支援」、「悩んだ時に気軽に相談できる窓口」、「図書館の開放」、「看護研究の支援」を望んでいた。本調査においても同様に専門的な研修や転職・再就職情報、卒業生ネットワーク、看護研究支援等が多い結果であった。研修や看護研究支援などは、すでに看護研究交流センターで取り組まれているが、卒業後に本学の研修・講座に参加したことのある卒業生は 13.0%にとどまった。今後は、研修不参加の理由を把握すること、研修をさらに周知すること、新人等のニーズに合わせた研修等を用意し参加しやすくするなどの工夫が求められる。また、転職・再就職情報、卒業生のネットワーク、メンタルサポートへのニーズもあるため対応を検討する必要がある。

今回の調査において本学大学院進学を検討している者がいること、認定看護師や専門看護師などより学びを深めたいと思っている者がいることは、現場の質向上に寄与する実践者を養成している大学としては喜ばしい成果である。看護専門職としてのキャリアの積み方はさまざまだが、今後も在学中のキャリア教育の充実をはかると共に臨床との連携を検討していく必要がある。

V 調査の限界および今後の課題

本調査における対象者は卒業時に大学に対して連絡先の開示を同意した卒業生 82 名であり、回答は 28%であったことから、卒業生全体のニーズを把握できたとはいえないかもしれないが、ある傾向は見いだせたと考える。

今後、定期的に調査を継続していくことで、困難さを克服するために大学としてできる支援の方向性が示されることが期待できる。そのためにも、卒業してからも大学とのつながりが途絶えないよう卒業生に大学への連絡先の開示に協力いただくこと、そのメリットが感じられるように卒業後に有意義な情報提供や魅力的な支援を用意して行くことが必要である。また、本調査から見えたことを一つずつ検討し、在学時から卒業生支援があること、看護研究交流センターの存在・活動を今以上に伝えていく必要が示唆された。

VI. まとめ

卒後 1～3 年目の本学卒業生への調査により以下のことがわかった。

1. 卒業後、多くの卒業生が業務上の困難を感じているが、学習の積み重ねなど自己研鑽を続け、周囲の人に相談するなどして乗り越えていた。
2. 卒業生は、多様な職場で看護職として業務にあたっており、その実践のために高度医療技術や広範囲な知識の習得が求められていた。
3. 卒業後の困難をひたすら耐えた者、いまだに克服できていない者がおり、その困難克服のためには在学時からの学習支援、カリキュラムの検討、卒業後の研修や相談体制、ネットワークの構築が必要であることが示唆された。

謝辞

本調査にご協力いただいた卒業生の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

日比野直子, 野呂千鶴子, 山路由実子 (2009) : 看護大学における卒業生サポートネットワークの構築をめざした卒業生動向の把握および支援ニーズに関する研究, 保健師ジャーナル, 65(08), 676-682.

三重県立看護大学地域交流センター年報 (2014) : 三重県立看護大学地域交流センター年報

<http://www.mcn.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2013/11/h25nenpou.pdf> (検索日 2014.6.17)

高林知佳子, 片平伸子, 平澤則子, 高島葉子, 後田穰, 小泉美佐子 (2014) : 看護職員県外就業状況等実態調査, 新潟県福祉保健部福祉保健課.

参考文献

岐阜県立看護大学看護研究センター案内（2014）：卒業生への支援，

<http://www.gifu-cn.ac.jp/information/pdf/ncc-pamphlet.pdf#search='%E5%B2%90%E9%98%9C%E7%9C%8C%E7%AB%8B%E7%9C%8B%E8%AD%B7%E5%A4%A7%E5%AD%A6+%E5%8D%92%E6%A5%AD%E5%BE%8C%E3%81%AE%E7%9B%B8%E8%AB%87%E6%94%AF%E6%8F%B4%E4%BD%93%E5%88%B6'>（検索日 2014. 6.17）

片岡三佳，流郷千幸，豊田久美子，他 1 名（2002）：滋賀医科大学看護学科卒業生の動向－就業・進学状況とその意識を中心にして－，滋賀医科大学看護ジャーナル，1（1），67-78.

佐藤秀子，森川英子，大川尚子，他 2 名（2006）：卒業生の就業状況と職務満足に関する実態調査，関西女子短期大学紀要，16 号，143-151.

清水実重，岩本幹子（1998）：北海道大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の実態調査，北海道大学短期大学部紀要，11，59-68.

社団法人日本看護協会中央ナースセンター（2005）：2004 年新卒看護職員の早期離職等実態調査報告書

「資料2－調査用紙」

新潟県立看護大学における卒業生支援のための卒後動向の把握および支援ニーズ調査

【回答方法】

- ① 回答について特にことわりのないものは、本年9月1日現在の状況をご記入ください。
- ② 問いに対するあてはまる番号を○で囲んでください。質問に該当しない場合にはそのまま次の問いに進んでください。

(1) 何期生ですか 1. 9期生(2014年卒) 2. 10期生(2015年卒) 3. 11期生(2016年卒)

(2) あなたが取得している免許等(全て)

1. 看護師 2. 保健師 3. 助産師 3. 養護教諭 4. 修士号()

(3) あなたの看護職員としての通算就業年数(離職期間を除く)()年()か月

注1:看護職員とは看護師、保健師、助産師、養護教諭等のいずれかをいいます。

注2:就業年数には、産休、育休、長期研修等の期間を含みます。

(4) あなたの最初の就業先を教えてください。(主たる従業場所、いずれか一つ)

1. 病院 2. 診療所 3. 訪問看護ステーション 4. 助産所 5. 保健所又は市町村
6. 教育・研究機関 7. 小・中・高等学校 8. 就職していない 9. その他()

(5) あなたの最初の就業先の配属科等を教えてください。具体的にお書きください。

(例:耳鼻科・皮膚科・泌尿器科混合病棟, 特別養護老人ホーム 医務室)

(6) あなたは卒後1年以内に業務遂行上、困難なことを経験しましたか

1. 経験あり 2. 経験なし

(6-1) その困難なことは何でしたか(複数回答)【質問6で あり と答えた方のみ記入してください】

1. 看護技術不足 2. 実習での経験不足 3. 実習で未経験の科への配属
4. 医療機器装着未経験 5. 大学での基礎科目の履修不足 6. 自分の勉強不足
7. 患者様とのコミュニケーションの未熟さ 8. 先輩看護師や職場での人間関係
9. 苦手な診療科 10. その他()

(6-2) その卒後1年以内の困難さをどのように克服しましたか(最も当てはまるものを選択ください)【質問6で あり と答えた方のみ記入してください】

1. 勉強した 2. 上司・同僚などに相談した 3. 同期の同僚に相談した
4. 親に相談した 5. 友人に相談した 6. 大学の先生に相談した
7. 研修・学会等に参加した(具体的に)
8. 自分なりの困難対処法・ストレス発散を見出した 9. ひたすら耐えた
10. 退職・転職した 11. まだ克服していない 12. その他()

(7) あなたは勤務先を変えたことがありますか 注:同一設置者内の転勤等は勤務先を変えたことには含みません。 1. ある()回 2. ない

(7-1) 勤務先を変えた理由は何でしたか(複数回答)

【質問7で ある と答えた方のみ記入してください】

1. 結婚、妊娠、出産、育児などで継続が困難 2. 職場の環境や雰囲気がよくない
3. キャリアアップを図るため 4. 人間関係 5. 身体的理由 6. 実家・地元に戻りたい
7. 仕事内容が自分に合わない 8. 待遇の良いところがあった
9. 以前の職場が希望ではなかった 10. なんとなく 11. その他()

(7-2) あなたの現在の就業先を教えてください(主たる従業場所、いずれか一つ)

【質問7で ある と答えた方のみ記入してください】

1. 病院 2. 診療所 3. 訪問看護ステーション 4. 助産所 5. 保健所又は市町村
6. 教育・研究機関 7. 小・中・高等学校 8. 就職していない 9. その他()

(8) あなたの現在の職場の勤続年数は何年ですか

1. 1年未満 2. 1年以上～2年未満 3. 2年以上

(9) あなたが現在求められている役割や立場はどのようなものですか(全て)

1. 一般スタッフ 2. リーダー 3. プリセプター 4. 委員会()
5. 実習指導 6. 研究チーム() 7. その他()

(10) あなたは現在、キャリアアップとして考えていることは何ですか

1. 認定看護師() 2. 専門看護師()
3. 修士() 4. 博士()
5. その他() * () 内には進もうと考えている分野をお書きください。

(11) 実際に就職して、もっと学んでおいたらよかったと思う科目は何ですか

1. 心理学 2. 教育学 3. 文化人類学 4. 社会学 5. 哲学 6. 法学 7. 化学
8. 生物学 9. 環境生態学 10. 自然人類学 11. 英語 12. 健康スポーツ学
13. 宗教学 14. 保健・医療行動科学 15. 医事法 16. 情報処理演習 17. 情報科学
18. 形態機能学 19. 感染学 20. 臨床生化学 21. 臨床病態学 22. 臨床栄養学
23. 疫学 24. 臨床薬理学 25. 保健統計演習 26. 社会福祉概論 27. 社会保障論
28. 行政法 29. 健康医療政策論 30. 公衆衛生学 31. 地域社会と住民組織
32. 地域経済論 33. 看護学 34. その他()

(12) あなたが卒後支援として大学に期待することは何ですか(主なものを3つまで)

1. 看護に関するトピックスに対応した研修 2. 事例のまとめの支援窓口
3. 研究支援の講座の開設 3. 個人研究の支援 4. メンタルサポート
5. 転職・再就職情報 6. 進学相談 7. 卒業生ネットワーク
8. その他()

(13) あなたは卒業後、本学の公開講座や研修会等に参加したことがありますか

1. ある 2. ない

(14) あなたは本学の大学院進学を考えていますか 1. いる 2. いない 3. 既に進学済

(15) 以下差し支えなければお答えください

- 性別 1. 男 2. 女
出身地 1. 新潟県内 2. 新潟県外
現在の就業地 1. 新潟県内 2. 新潟県外
配偶者の有無 1. 未婚 2. 既婚
子どもの有無 1. いる 2. いない

(16) さいごに、卒業生支援や大学に対する要望など、お書きください。

* ご協力ありがとうございました。